インド通信

第475号 - 2018.5.1 -

インド文化交流センター

〒143 東京都大田区山王1-13-7
臼田わか子気付TEL(03)3772-0960

インド通信版

GAZETTEER OF SOUTH ASIA

＜南アジア地誌事典・第250回＞

旅行者のプネーPMPMLバス活用術

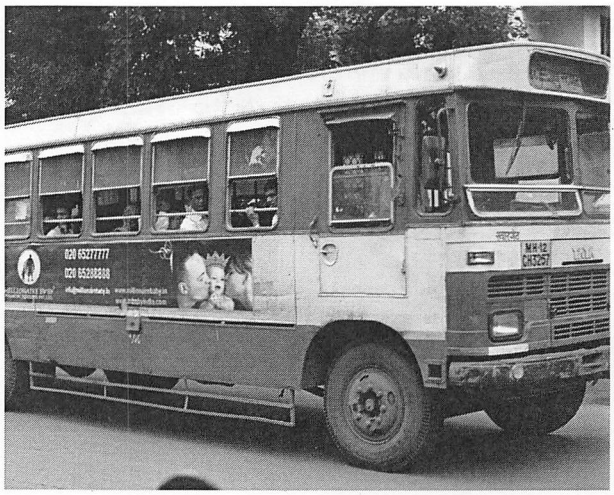
大島 智靖

旅の風情を大きく左右するのは，現地での移動手段ではないだろうか．昔ながらのタンガからハイヤーまで，乗り物の選択肢が多いインドの場合は，何に乗るかによって風景も印象もかなり変わる．日印往来が重なってくると，タクシーやオート・リキシャを「卒業」して公共の電車・バスを利用してみたい，と思うようになるのは旅人の自然な生理現象．

しかしながらメディアが喧伝するのは，溢れんばかりに(いや実際溢れてしまっている)ギュウギュウ詰めのシーン．こんなものを見せられてはビビるのも致し方なしであろう．

プネーの街を歩いていると，赤を基調とした，レトロ感(ボロい)と開放感(ドアや窓がない)に満ちたバスを目にする．安く移動できそうだが，自分には踏み込めない結界領域のように見えて，「いつかは・・・」と密かに憧れるだけのシロモノであった．

さて，そんな想いを募らせつつ，今年もワルジェーに住む婆羅門，クルカルニーさんのお宅を訪問した．最近執行したヴェーダ祭式について聴いたり夕方のアグニホートラ(日没時にマントラを唱えながら祭火に供物をくべる日常ヴェーダ儀礼)を見学したりと，取材や食事を終えると夜10時近くなったのだが，私がホテルまで歩いて戻ろうとするとクルカルニーさんが難色を示した．どうやらこの客人を心配してくれているらしい．



「夜遅くなるとオートはぼったくるし，酔っぱらいとか変な輩もでてくるから，市バスで帰るといいよ」

と息子のアーナンダ君が言う．

「は？いやムリムリ」

あの結界に踏み入る心の準備なんぞ，できているはずもない．すると，アーナンダ君がバス停までついて行って，私が降りるバス停を教えてくれるよう，コンダクターに伝えてやると言う．

コンダクター？

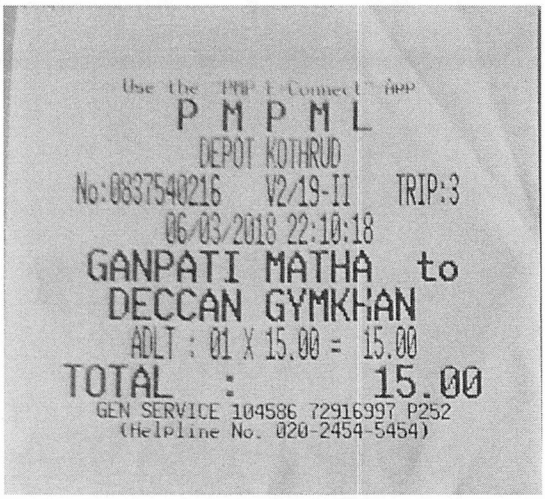
へえ，バスに車掌がいるんだ．そういえばバンコクで乗ったバスも車掌付きだったな．でもそれ，ホントにうまく行くんか？

夜も更けて歩くのも億劫な気分になっていたので，ちょっと冷静に考えてみた．とりあえず一本道だし道中の景色はよく把握している．勝手知ったるカルウェー通りだ．乗り方をクリアして，乗るバスさえ正しければ，どうも何とかなりそうな気がしてきた．

ところで，愛する街の名誉のために申し上げるが，魑魅魍魎がうごめく魔界都市デリーやムンバイに比べれば，ここプネーではメーターで良心的に走ってくれるリキシャ・ワーラーは少なくない．私は一度，1 ルピーのお釣りを律儀に返してくるリキシャ・ワーラーに出会ったことがある．なんというカタルシス！見上げるような高潔の士だと感心したものだが，話を聞いてみると，貿易商をリタイヤしたあと趣味でリキシャ・ワーラーをやっているという御仁であった．しかしそんな出会いが度々期待できるはずもなく，概して夜のヤツらの態度はホメられたものではない．ここは言う通りにしてみるか…．独りでは難しいと思っていたことも，誰かの助けを得られればいとも簡単に達成できることがある．こうしてバス体験のきっかけは，突然やってきたのであった．どうせなら一緒に乗ってほしいものだが，そこまで要求するのもナンだし，「はじめてのおつかい」気分でチャレンジしてみよう．約 8 km，わずか 15 ルピー！

プネー市街を縦横に走る PMPML 社のバスは，統合前の前身会社も含めれば 70 年近い歴史を持つ市民の足だ．ナンバーと行き先が利用の鍵となるのは京都の市バスと同じである．

市民のマハーヤーナ，大いなる乗り物を司るのはコンダクターと呼ばれる車掌さんである．乗客はコンダクターに行き先を告げ，料金を支払う．ドアもないバスで入り乱れる乗客を漏れなく把握し，キッチリと料金を徴収するその仕事ぶりはまさに職人芸である．そしてこの空間には一切のぼったくりがない．



空港ターミナル間移動の無料シャトル内にすら訳の分からない理由をつけてハシタ金を徴収しようとする輩が潜んでいるこの国にあって，この空間には一切のぼったくりがない（重要なのであえて二回申し上げた）．まさしくブッダ・クシェートラ，仏国土．荒っぽい運転も凄まじい騒音も極楽を荘厳するアイテムに変わる．慈愛に満ちたお釈迦様の懐に身を寄せるような心地よさだ．少々ぼったくられるのも旅のスパイスだと思えるような大らかな人間でありたいと常日頃心がけてはいるのだが，こんなにも幸せを感じてしまって申し訳ない．プネーの涼しい夜風を頬に感じながら，「日本のバスではオープン・カー感覚は味わえないよなあ」などとアホみたいなことをしみじみ感じながらのクルーズであった．

味をしめた私は，翌日も「練習」と称してバス亭観察と短距離移動に勤しんだ．必須アイテムは路線図とグーグルマップ（スマホ+Wi-Fi ルーター）である．地元民は路線・時刻表アプリを入れているようで，私も何種類かアプリを試してみたが，乗り継ぎが複雑になるとやや信頼性に欠けることもあるので要注意．まずグーグルマップで最寄りと目的地周辺のバス停を調べ，アプリでルートを割り出す．

グーグルマップでバス停をタップすれば，そこに来るバスの No.と行き先が次々と表示される．これは圧巻の便利さだ．もちろん時間通りではないが，(インドにしては)なかなかの精度でやってくる．それを確認するだけでも楽しい．ただし，グーグルマップのバス停の位置はズレていることもある．私が利用した JM ロードの「ナトラジ・トーキーズ」は，実際は表示より 140m 南西寄りにあり，要訂正だ．また GPS を見ながら降りるバス停を窺っていたら，降り過ごしてしまったこともあったが，そのときは 5 ルピー追加徴収で済んだ(安くて嬉しい)．バス停にはどこを探してもバス停名がないので，そこは誰かに聞くか，GPS とマップを頼りにするしかない．地元民も自分が利用しているバス停名を間違えて覚えていることもあり(経験済み)，けっこう奥が深いのだ．とにかく初めのうちはスマホと Wi-Fi ルーターが必携である．

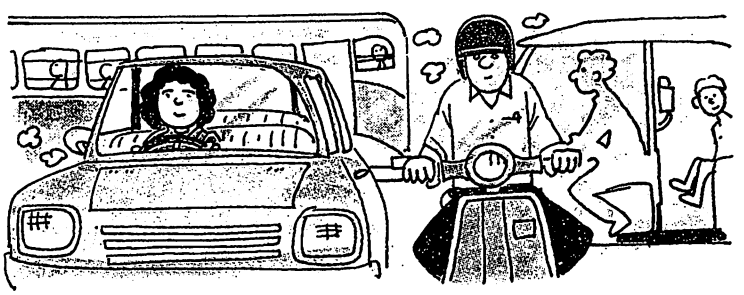
車窓もこの上なく楽しいが，車内観察も楽しい．先ず気付くのが，大抵の場合ギュウギュウ詰めなのはバス停で人々が乗り込んでくるときの入口(バス後部)だけであり，車内は思いのほかゆとりがあり平穏であることだ．

慢性的に 10 分～20 分前後の遅れがあるため，バスとしてはあまりバス停に留まりたくない．だからほどほどに客を乗せたら後は振り落とすように(！)見切り発車する(従ってデーヴァナーガリー文字の No.と行き先を素早く判別するのが利用の大前提となる．文字に馴染みのない人にはそれが最初の難関かもしれないけれど，まぁ慣れましょう)．その辺を見極めて発車を合図するのはコンダクターの役目である．客はそれを分かっているから，必死で乗り込もうとする(ときにはぶら下がる)のだが，「余分」と判断された客は，コンダクターが鳴らすレトロで趣き深い発車ベルによって振り落とされるのだ．こうして車内は見事に調和が保たれているのである．「どうしてあの世が死にゆく者たちで満杯にならないか，知っているかね？」というウパニシャッドにおけるジャイヴァラ・プラヴァーハナ王の問いを思い出すではないか(言い過ぎか，すまない)．なんとなく左右で男女別に分かれて座っていることが多いのもインドらしい．

もちろんラッシュ時はかなりの込み具合なので，降りるバス停が近付いたら前方に移動しておく必要がある．皆上手に移動するのだが，面白いことに地元民ですらけっこう必死感があるのである．なんせ運転手もコンダクターも乗降客に対してほとんど配慮がないのだから，降り過ごす可能性は常にあるのだ．このほどよい緊張感もまたバスの醍醐味なのかもしれない．快適で楽しいバス移動，是非お試しあれ！

写真

・48 番プネー駅行き

・はじめてのチケット

おおしま ちせい：ヴェーダのブラーフマナ文献における神話解釈学を主な研究領域とするが，隙を見てはプネーに飛ぶ．東京大学大学院人文社会系研究科死生学・応用倫理センター研究員，現在求職中．